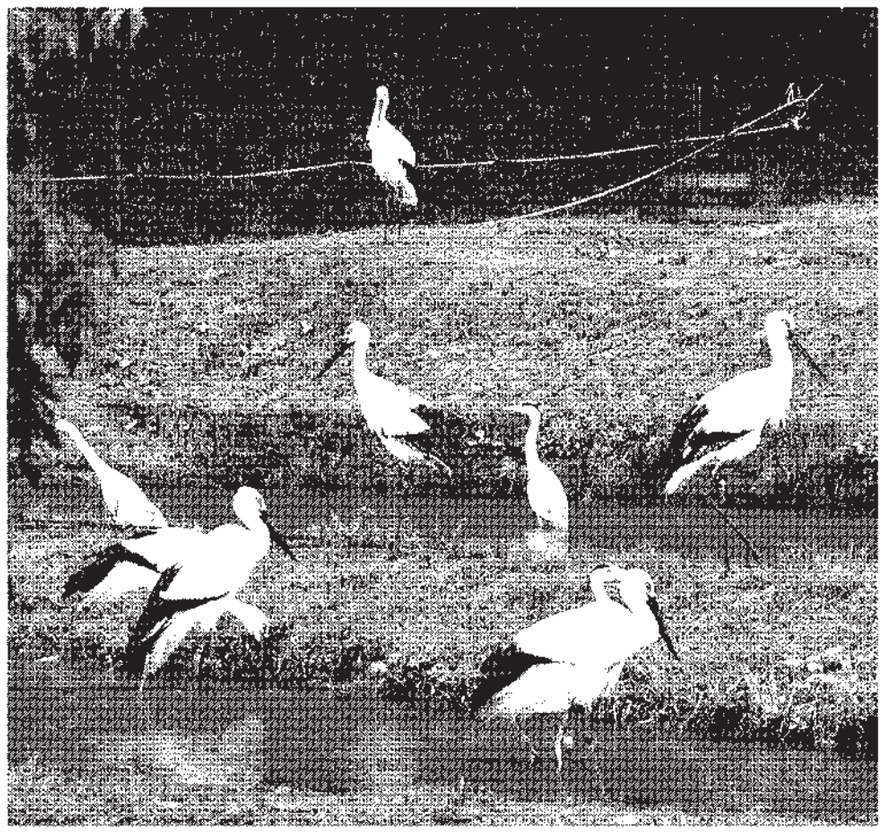
帰ってきたコウノトリ



兵庫県立コウノトリの郷公園で、来園者に公開している池で飼育されているコウノトリ=5月25日、須藤撮影

第16回 日韓国際環境賞

東アジアの環境保全と地域社会への貢献を目指し、毎日新聞社と朝鮮日報社が共同で主催する「日韓（韓国）国際環境賞」は今年で16回目を迎える。今年は国際生物多様性年。10月には名古屋市で生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）が開かれることから、環境への関心が一層高まっている。同賞の応募締め切りは8月19日。10月中に日韓両国の審査委員会が各1件を選び、10月28日に韓国・ソウルで表彰式をする。募集開始にあわせて、兵庫県豊岡市でのコウノトリ保護の取り組みを取材した。【須藤晃】

兵庫・豊岡 共生へ農薬削減

兵庫県北東部にある豊岡盆地は、街を貫いて流れる円山川に高低差がほとんどないため、昔から上流の大雨で水害に見舞われてきた。水辺で暮らすコウノトリにはすみやすく、低湿な水田での重労働を強いられる人にとっては厳しい環境だ。

明治時代、「富国強兵」の政策のもと食糧増産が叫ばれると、鉄砲の普及と相まってコウノトリは受難の時代を迎えた。古くからコウノトリの営巣地だった豊岡では事情が違った。前豊岡市役所コウノトリ共生課長で現在は「コウノトリ湿地ネット」副代表の佐竹節夫さん(61)は「町を挙げた保護活動で、営巣地近くにはコウノトリ見物のための茶店ができて、見物を観光にしていた」と話す。

一度は絶滅

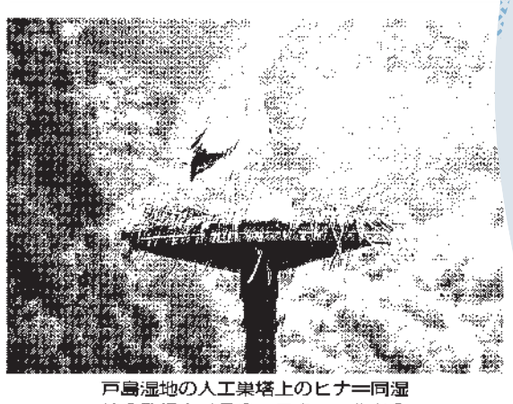
この地区ではコウノトリはその後も増え、1930年代には豊岡盆地で100羽近い個体を確認した。だが、第二次世界大戦と戦後の混乱、高度経済成長期の農薬の使用などで、コウノトリがすみにくい環境となり、71年に日本のコウノトリは絶滅した。

野生復帰計画

飼育コウノトリが20羽になった92年、「野生復帰計画」が立てられた。環境の悪化が絶滅の原因だったから、野生復帰にはコウノトリがすめる環境を取り戻すことが必要だ。餌場である水田や用水路に餌となる魚類やカエルをよみがえらせるには、農薬の使用や用水路の構造も変えなくてはならなかった。

その象徴が「コウノトリ育むお米」。兵庫県産のコシヒカリを化学農薬を使わない、あるいは使ったとしても使用量を減らして栽培する。田植えの1カ月前から水田に水を張ってドジョウやカエルが増えやすくする。田の水を落とす中干しも、オタマジャクシがカエルに、ヤゴがトンボになるまで待つ。冬も水を張ってイトミミズやプランクトンを増やす。このように農業者を巻き込んだ取り組みが今も続く。

それに先立つ63年、14羽となった時点で豊岡市は野生個体を捕獲、65年には「コウノトリ飼育場（現コウノトリ保護増殖センター）」を作り、人工繁殖を始めた。日本で捕獲したコウノトリは絶滅したものの、旧ソ連から譲り受けた幼鳥6羽から、89年に初めてのヒナが誕生。人工繁殖に取り組んでから24年かかった。



戸島湿地の人工巣塔上のヒナ=同湿地の監視カメラのモニター画像から

コウノトリ
体長約1・1㍍、翼を広げると約2㍍、体重4～5㌔。ロシア・中国国境のアムール川流域で繁殖し、韓国、日本、中国東南部に渡って越冬する。越冬地での環境次第で、その地にとどまることがある。肉食性で大食。生息数2000～4000羽とみられ、ワシントン条約で取引が禁止されている。日本では特別天然記念物にも指定されている。

経済との両立

豊岡市の中貝宗治市長は「『コウノトリもすめる』が目標であり、『コウノトリが』ではない。これには辛抱が必要だし、批判もあった。コウノトリの餌が豊富というだけでなく、人間にもコウノトリと共生するためのおらかさが要る。つまり文化が必要なのだ」と説く。同市は「環境経済戦略」を05年に制定（07年改訂）し、環境に良い取り組みが経済を活性化させ、経済効果によって環境への取り組みが進むという相乗効果を目指す。

人工繁殖の拠点として99年に開園した兵庫県立コウノトリの郷公園で飼育されているのは98羽、野外生息数は36羽、今年野外で生まれたヒナが6羽の計140羽。同公園の主任飼育員、佐藤稔さん(46)は「一気に増えすぎだ。そんなにたくさんが育つほど環境がまだ追いついていない」と懸念する。一方、「冬場でもウシガエルやザリガニを見つけて食べる。里山の自然復活を訴えるには分かりやすい生き物だ」とも話す。

市を挙げて生物多様性に取り組む豊岡市だが、同市コウノトリ共生課の宮垣均さん(39)は「多様性のためには何をしたらいいのか市民に具体的な行動指針を示す必要があると思う。外来植物を抜く、河川に魚がすめるたまりを作るなど小さなことでいいので行動してほしい」と話す。

韓国も放鳥へ

韓国も2012年の放鳥を目指す。韓国中部にある忠清北道清原郡の韓国コウノトリ復元研究センターでは、99年に東京都多摩動物園から贈られた受精卵から生まれた韓国初の人工ふ化の雌とドイツ生まれの雄がつがいとなり、02年に人工繁殖に成功した。元々国境を越えて移動していたコウノトリの大きなネットワークができる日も近いかもしれない。

人工湿地にペア飛来

円山川の下流に09年4月、豊岡市立ハチゴロウの戸島湿地が完成した。水田や埋め立て地だった円山川の隣接地を市が買収し、兵庫県と豊岡市が造成した人工湿地でコウノトリの餌場にするのが目的。広さは3・8㌶。日本海から約3・5㌔と近いため、円山川を海水が上り、湿地には汽水域もある。「ハチゴロウ」とは02年8月5日に大陸からこの地に飛来したコウノトリの名にちなむ。

湿地にはコイ、ボラ、フナといった魚、スジエビ、テナガエビ、モクズガニなどの甲殻類、カエルなどが生息している。佐竹さんはコウノトリがすめる湿地の条件として「餌になる生物がいること。コウノトリが餌を捕れる状態にあること」を挙げる。コウノトリは水に潜って餌は捕れない。「約25㌢のくちばしで突いて食べるので『数打ちゃ当たる』というくらい、うじゃうじゃいないといけない」という。

耕作放棄田 地区の人々が整備

田結地区の耕作放棄田に水の流れが復活し、カエルたちのすみかになっている =藤田宰司撮影

戸島湿地に設置された人工巣塔には、完成前の08年から3年連続でヒナが誕生した。

戸島湿地からさらに日本海に近い同市田結地区は古くから半農半漁の集落だった。農地は山に挟まれた谷あいにあって機械の導入が難しく、05年を最後に耕作放棄された水田があった。普通、耕作放棄された水田は乾燥し、やがて山林化するが、地形の影響からか、ここは茎の短い植物が生え、カエルなどがすむ湿地のままだった。

目を付けたのが戸島湿地で営巣するコウノトリのペア。08年以降、頻繁に飛来、餌を捕る姿がたびたび目撃されるようになった。地区の人たちとコウノトリ湿地ネットは、多様な生物が暮らせる湿地のままに保てるよう、あぜを作ったりモウソウチクを刈ったりと作業を続けている。

2010年6月18日（金）の毎日新聞に掲載された「帰ってきたコウノトリ」の記事。

読み解いてみると、コウノトリの生態系をはじめ、環境問題、地域をとりまく社会や行政、さらには経済問題や世界情勢などさまざまな要因が関係していることがわかります。

これからの時代、ますます複雑化する社会で求められるのは、
総合的な視点で課題の本質を見抜き、解決へと導くチカラです。
近畿大学では、これからの社会で活躍する人材を育成するために「総合社会学部」を開設。
12学部48学科をもつ総合大学だからこそ実現できる、文理の枠を越えた複合的なプログラムを展開しています。

社会を見つめるチカラを磨く。
総合社会学部
■社会・マスメディア ■心理 ■環境

BLYTHE is a trademark of Hasbro. ©2010 Hasbro. All Rights Reserved. BLYTHE character rights are licensed in Asia to Cross World Connections, Ltd. Licensed by Hasbro. www.blythedoll.com blythemobile.com

オープンキャンパス2010 7/25(日) | 8/21(土) | 8/22(日) | 9/26(日)
〈お問い合わせ〉入学センター(06)6730-1124 〈入試情報サイト〉http://kindai.jp 【時間】11:00～16:00 【場所】東大阪キャンパス 事前申込不要／入退場自由

総合社会学部で学ぶ“ブライス”のブログ『Peaceful Life』公開中♪
PC & Mobile ► http://www.kindai-life.jp

近畿大学 KINKI UNIVERSITY